

<目的> 備前焼は1000年にわたって製法が継承されている伝統的産業で、主に世襲である。窯元や作家の世帯では、土練りから販売までの一連の作業は家族員で行なっており、伝統的な役割分担として、作家の妻が家事労働に加えて陶土の管理や作品の販売なども担当してきた。しかし、山陽新幹線開通（1972年）瀬戸大橋開通（1988年）による近年の好景気の中で、1970年代以降、新たに築窯独立した作家が多い。そこで、本報告では、経営形態や役割分担に着目し、伝統的生活様式の継承と変化の過程について明らかにする。

<方法> 備前焼作家のほぼ全数260名（1989年現在）を対象に、郵送留置法によるアンケート調査を実施した。調査票は、世帯用、夫用、妻用の3部からなり、調査項目は、経営形態、家業と家事の担当程度、生活時間などである。発送は1990年11月下旬で、12月20日までに回収を終了した。回収数は129（回収率49.6%）、有効回答数は123であった。対象者の平均年齢は、夫50.1歳、妻46.7歳、家族構成は、核家族51.2%、拡大家族44.0%、家族人数は平均4.6人、創業年は1675年が最も古く昭和40～59年が65.0%を占めている。

<結果> 経営形態では、店舗が自宅にあるのは60.1%、窯が自宅にあるのは71.5%で、全体の48.8%は自宅内に店舗と窯を有する伝統的な形態であった。従業員が常時いるのは40.7%で、創業が古いところが多い。役割分担のパターンでは、夫の家事参加の有無と妻の家業への参加程度から、5類型が認められ、伝統的タイプが4割を占めた。創業年の古いところは伝統的タイプが多く、拡大家族では異世代間の分担が3割程度みられた。夫は50歳代、妻は40～50歳代の前後で分担のパターンが異なる傾向が認められた。